Photographic Society of
Zone System

ゾーン・システム研究会会報
発行日：2007.8
発行者：中島秀雄
事務局：畑文夫
編集部：荒井崇

NO.37

CONTENTS

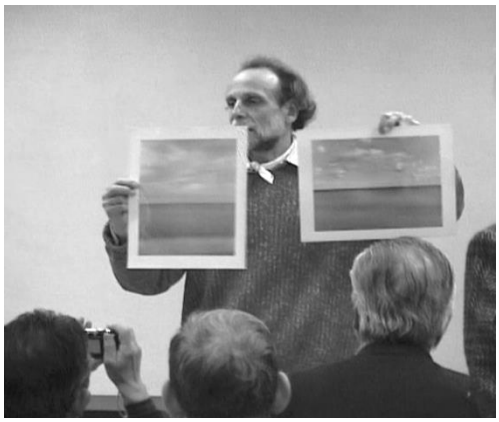
- エドワード･レビンソン”ピンホール写真の魅力” を聞いて
- 宇野裕さん自作 11x14 カメラデモ
- 葛西臨海公園撮影会スナップ
- 写真蒐集家の気ままな散歩（3） ー何をコレクションするか
- ゾーンシステム研究会定例会日誌
- インフォメーション

エドワード・レビンソン
”ピンホール写真の魅力” を聞いて

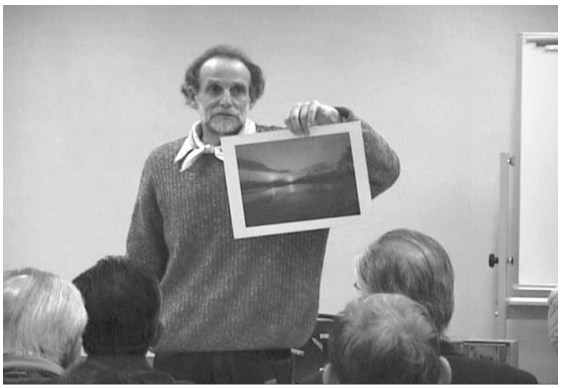
中島秀雄

ピンホール写真(針穴写真)が静かなブームとなって久しい。昨年にはピンホール写真協会が設立され、今年になってそれが二つに分かれたという話を聞いた。つい先頃、新宿のギャラリーでピンホール写真協会の人と話す機会があり、私の知り合いも会員として名を連ねていることを知った。一般の話から話題がピンホール写真に移ると相手の表情も一変し、私が考える以上にその思いは深いのかもしれない。この現象は日本ばかりではなく、アメリカの写真界でもピンホール写真で賞を取る人も現れ、まだしばらくは続くのかもしれない。

かつて私が蒲田の学校で写真を教えていたとき、針穴カメラを利用したことがある。針穴カメラはその単純な構造から自作が可能で、カメラを作る遊び感覚と手軽に撮影できることから優れた写真教材として利用してきた。一部の学生はそのプリミティブな世界に魅せられ、ピンホール写真を卒業作品としてカメラごと提出する学生もいた。ダンボールやベニヤ板で作った針穴カメラはフリーな気分で被写体に向き合え、針穴が生み出す甘い映像に彼らの心は引きつけられたのだろう。その後、絞り、シャッター、三脚、フレーミングといった写真の基礎に話が移ると彼らの表情は曇りがちだった。



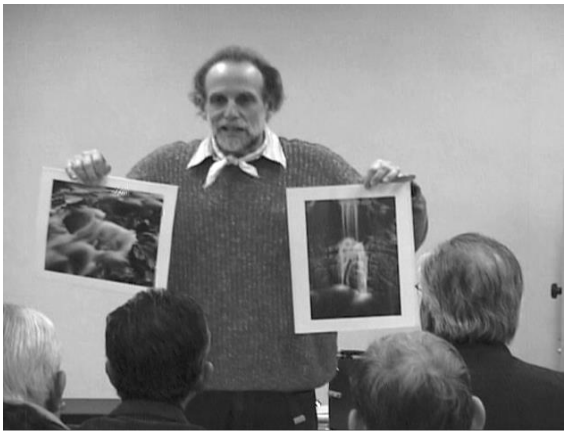
海と空



太陽が2つ

エドワード・レビンソン氏のピンホール写真は以前から気になっていた。一般のピンホール写真のどれを見ても私にはほとんどお遊びにしか感じられない中で、彼の作品には何か引きつけられるものがあった。作品の内容に創造的なものを感じ、最終作品のプリント仕上げに丁寧なものを強く感じていたからだ。

レビンソン氏は元々精神世界に興味を持っていたようで、それを具現化するための手段として写真を選択したように思えた。大学では正統な写真教育を受けていて、写真の基礎から現像、プリント、そして、仕上げのすべてを学習したもののどうしても自己表現とのズレを埋めることは出来なかったようだ。絞りやシャッタースピード、焦点合わせといった写真撮影の約束事や手順がしだいに自己表現に合わない厄介なものとして感じたことからカメラがじゃまになり、写真から手を引いてしまった。その後、多くのアーティストと語る内にピンホールカメラによる表現の可能性を知り、撮影の複雑な約束事から開放されることからより強く興味を持つようになる。転機はエドワード・ウエストンのプリントを見たときだった。ウエストンの海の写真を見たときレビンソ



滝

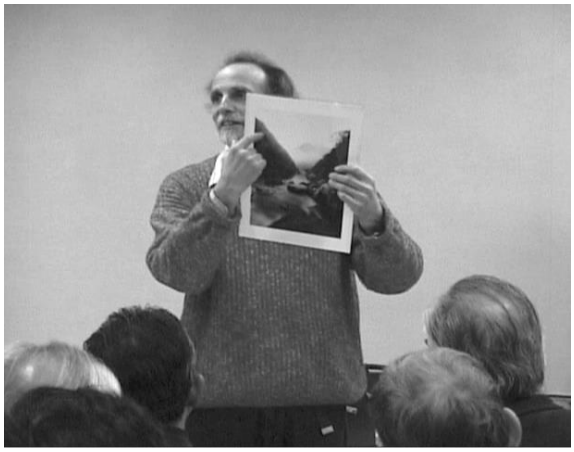
ン氏は、ピンホール写真だと思ったといっている。写真に関われば、誰でも一度はウエストンの写真を見ることになる。ウエストンは大型カメラを海岸に持ち出し、岩の位置や水平線の位置を巧みに計算し海の写真を撮っている。私はウエストンの写真を見てピンホール写真と思ったことはないが、大型カメラをシンプルな道具として扱っていると直感したことがある。大型であれ、小型であれカメラを厄介な道具と思っているうちは作品は作れない。

レビンソン氏は、ウエストンの海の写真を見て自らの精神世界と何かつながるものを感じ取り、それは針穴カメラによって増幅すると確信し、同時にトラウマとしての**写真機**から完全に開放された瞬間だったのだろう。それ以来、彼の心には細い光が差し込むように針穴カメラの情報がしだいに増えて行き、4x5 フィルムを使ったより積極的な針穴カメラを知ることになる。試行錯誤の末、やがてピンホールカメラによる自己表現のスタイルを確立し、作品発表、写真集出版へとつながっていった。そして、2007 年度国際コンペ「パリ写真賞」プロ書籍部門第１位を受賞することになる。

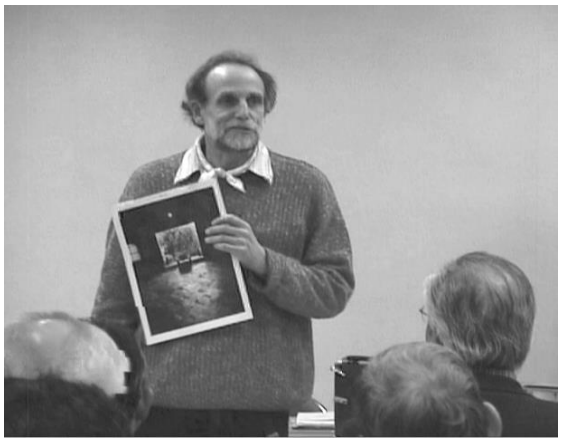
今回、レビンソン氏は何台かの針穴カメラを用意してくれた。その１つは、ピンホールのバイブルといわれる本(ピンホール・フォトグラフィー)を出版したエリック・レナーがデザインした**”レオナルド”**という名前の針穴カメラだ。合板による堅牢なデザインで、レーザーで処理されたピンホールが前面に付き、簡単な開閉装置(シャッター)もついている。ピントグラスはないが 4x5 のホルダー、ポラロイドホルダーが装填可能で、ゴムが巻かれた取手を動かすことでホルダーが固定されるシンプルなデザインで美しい。合板の裏ふたにはレオナルド・ダビンチの肖像画がプレートされていて、このカメラがダビンチの時代までつながっていることを意識させてくれる。(ダビンチのモナリザはピンホール装置の助けがあったという人もいる)

他の手作りカメラは一台が望遠用、もう一台はワイド用と説明があり、あきらかにピンホールの位置からフィルム面までの長さが違い、ワイドは短く、ロングはその倍ほどあった。

最も注目したのは蛇腹の付いた針穴カメラだ。Finney 4x5 Pinhole Camera と名がつけられたニス塗りの美しいカメラだ。前板と後ろ板を蛇腹でつなぎ、タスキ掛けの金具で保持されている。黒の蛇腹は適度な硬さがあり、その長さを測るメージャーも付いている。蛇腹の長さを変えることで焦点距離が変わることからメージャーで計測



川と渓谷



寺

し、それに応じてピンホールの径が選択できるように前板には回転式の様々な径のピンホールが付いたピンホール交換可能カメラになっている優れものだ。アメリカ人の徹底した拘りが感じられ、工芸品のような仕上げに眺めているだけでも楽しい。また、撮影にはフィルターも積極的に使っているようで、ゼラチンフィルターを細かく切ってテープで止め、いつでも使えるようにカメラの裏ふたに貼り付けている。使うときはピンホールの前につけるときもあるが、後ろにつけるときもあり、着けっぱなしで忘れてしまうときもあるようだ。ジョン・セクストンのワークショップに参加したとき彼から多くのサゼスションを受けたようで、話の端々に氏の名前が出てきた。メキシコでは雲が多くいつもフィルターはつけっぱなしだといっている。オレンジとイエローが多いようだ。針穴カメラの特長をあえて言えば、Unlearning, Unthinking だと氏が言うように、写真機にまつわる手順や約束事にほとほと手を焼いていた様子が分かる。しかし、露出は重要でスポットメーターで暗部、ハイライトを計っていたが、今は勘でわかるといっている。フィルムは現在 T-MAX100 を使い、現像も慎重に進めているが、ほこりの処理には困っているようで、オペークを使ってネガ修正することもよくあるといっていた。

作品の解説

海と空

千葉の海を撮った写真は昼間 15 秒で撮影し、夕方は 2 分で撮影した。

自宅から海は見えないが、空がよく見えるので空の感じをみて出かけようにしている。

太陽が二つ

写真は二重露光で撮影した。一回撮影し、わずかに動かしてもう一度撮影した。太陽が二つ写っている好きな写真だが、現像のとき画面に何かが入ってしまい、ネガ修整するためにアメリカの知り合いに頼んで新しいネガを作ってもらった。$500 もかかったが、どのようなやり方なのかわからない。作品が一回売れればいいと思い支払った。

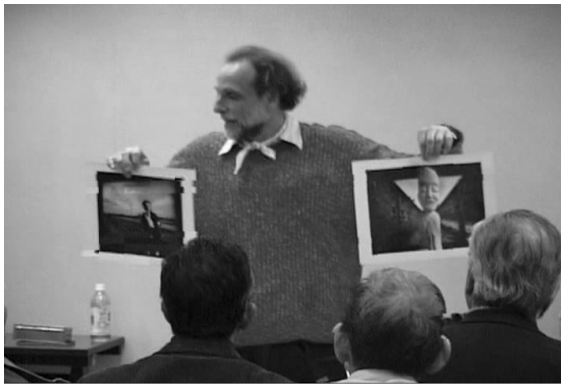
滝の写真

滝に近づけないのでプリントのときトリミングしてプリントした。

川と渓谷の写真

ストレートプリントは空が白く飛んでしまい、そこだけフラッシングしてトーンを出した。

レンズをいっぱいに絞り、2-3 秒光を与えることでトーンが自然に出てくる。セクストンは ND フィルターを使って処理するといっている。ストレートプリントは面白くないのでいろいろコント



人形

ロールすると面白くなってくる。ハイライトは0-1号を使い30秒間を3ヶ所やることもある。

寺の写真

寺の中で16分の露光中誰も来なかった。しかし、撮影後引き蓋が入らない。車に戻りダークバックに手を入れてフィルムを取り出し、心配なのでもう一度撮影したが、誰も来なかった。(引き蓋の溝にフィルムが入ってしまうと、撮影後引き蓋は戻らない。フィルムの装填ミス)

引き伸ばし機はゾーンⅥのVCヘッドが付いているものを使っている。光源でコントラストを調整することの出来る優れものである。毎回、プリントの裏にはプリントデーターを書き込む。空をどのように処理するかいつも考える。コンペンセイティング現像といって、オーバー露光にし、現像をアンダーにしてやるとコントラストが下がる。暗室には**ラウンド・ファイリング・キャビネット**があり、どんどん捨てるのがいい。つまり納得するまでたくさんの試しプリントをつくり、どんどん捨てるのがよい。

捨てたプリントをちぎって名刺代わりしている人もいる。

人形写真

以前手に入れた人形をどのように撮ろうかずっと考えていた。背景にプリントを立てかけて撮ることを思いついた。まだ4枚しかない。

シルエット写真

シルエット写真はスライドスクリーンを利用している。

太陽光で影を作り撮影する。カメラで撮るとスクリーンの汚れやきずが出てしまい見苦しくなるが、ピンホールはぼけてくれる。ネガは薄く、4-5号でプリントした。

フィルム現像はJOBOの10枚入りタンクを使っている。

シルエット

・・・・・・・・・・・・・・・・

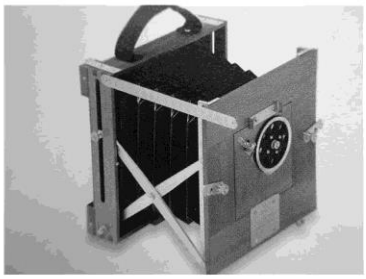
レビンソン氏の話を聞いていて**写真は暗室で創っていくもの**という思いを強くした。しかし、ピンホールカメラだから約束事はなく自由に撮れるとはいっても、どのようなネガになるか分からない。とても厄介なネガの連続になる方が多いように感じた。そのネガから新たなイメージを創りこんでいく必要があり、情熱以上に強い意志と我慢強さが要求され、これをライフワークとすることの難しさを私は感じた。しかし、レビンソン氏にはすべての困難を乗り越える確固たる写真表現のテーマがあると感じた。ここに他の多くのピンホール写真愛好家との違いを感じた。デジタルの進出もあってメカニックな写真にほとほと飽きて、レトロな世界にひたりたい。現像、プリントがうまくいかず、ピンホールカメラなら何とかなる。ピンホールカメラは失敗が無いし批判されることもなく自由だ。徹底して楽な方法に拘ってみよう。流行りものに乗ろう・・・のような動機でピンホール写真に入る人には根底に写真表現のテーマがない。

私達のテーマは目の前の美しい被写体を印画プリントの美しさにそのまま転換したいという基本的な欲望に根ざしている。それゆえにシャー

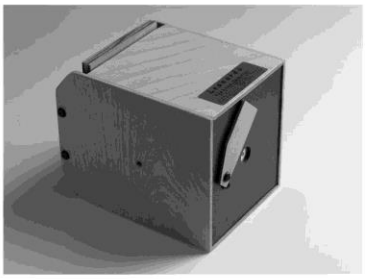
プな画像、豊かな階調表現が必要でそのためにカメラの特性、フィルムや印画紙の特性を充分に知る必要があり、そこに面白さがたっぷり詰まっていると思っている。

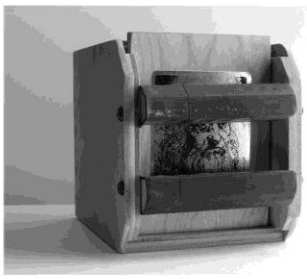
ゾーンシステムは、そのための方法論としてすぐれたテクニックだと改めて感じた。

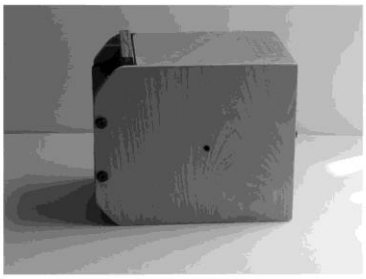
エドワード・レビンソン氏レクチャーで紹介されたピンホールカメラ

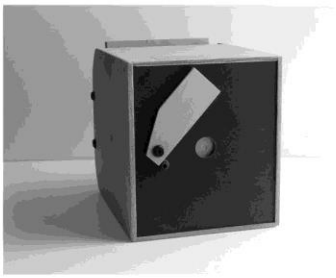


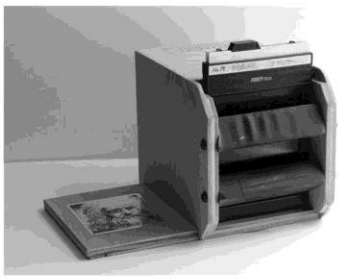
Finney 4x5 Pinhole Camera











レオナルド

宇野裕さん自作 11x14 カメラデモ

（５月１２日（土）例会にて）

レポート：荒井崇

ゾーンシステム研究会会員である宇野さんは、会員の中で唯一、大型カメラを自作する方であり、これまでさまざまな大型カメラを製作されている。

今回は、例会にて自作11x14カメラをデモしていただいた。

今回のレンズは３００ｍｍと４８０ｍｍの印刷用レンズを使用。

印刷用レンズはレンズ内部にシャッターが無いので、外付けのシャッターユニットが取り付けられている。今回のシャッターユニットはジナーの既製品で、シャッター精度を確保するため、絞り径によってシャッタースピードが補正されるようになっているそうだ。

フィルムは富士のアクロスで、メーカーにカットしてもらったそうである。カットの注文は、渋谷のナショナルフォトに頼んだそうである。
もちろんフィルムホルダーも手作りで、細部の加工が丁寧になされていた。

あおりに関しては、必要な機能がほぼ付いていた。バック／フロント両端チルト可能、フロントライズ／フォールも可能である。

ファインダーはフレネルレンズ付。やはりこれが無いと暗くて使いにくいそうだ。

三脚との締結は何とネジを使用して無い。万力のような小型バイスを４箇所使用し、しっかりと固定。さすがに重要なポイントは工夫が凝らされている。

また、ジャバラも自作。ラシャ紙を折って自作するそうである。

そしてひとつアドバイス。カメラ内に余計な光線をカットする壁を設けると、フレアーを防止でき、より良いカメラとなるそうである。

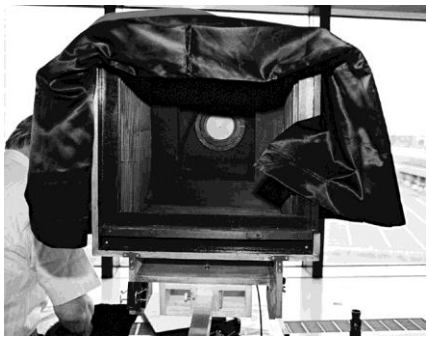
以下写真を多数掲載したので、その詳細をじっくり確認していただきたい。

今回は、その場で撮影したフィルムを中島先生に持ち帰っていただき、現像・プリントしていただくことになった。仕上がりが楽しみである。

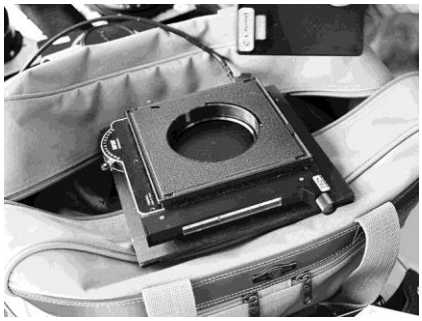
自作のカメラでなくとも、カメラの修理・改造などで、参考になりそうな要素を多く学ぶことができたデモンストレーションであった。

セッティングを行う宇野さん

窓越しに撮影する中島先生

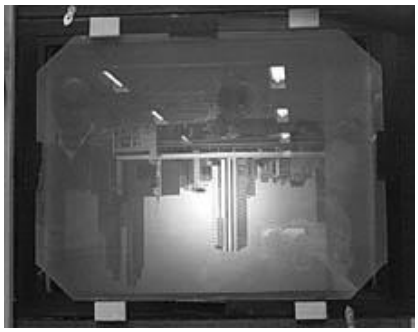


カメラ内部

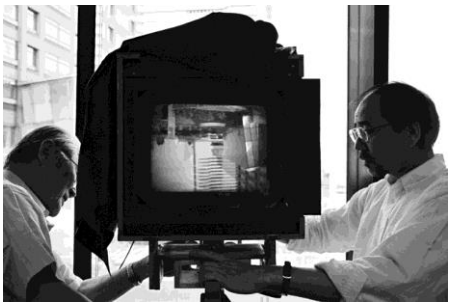


シャッターはジナーの既製品
何と絞り補正機能付

カメラをバラした状態



ピントグラスはフレネルレンズ仕様



２人がかりで撮影位置へ移動

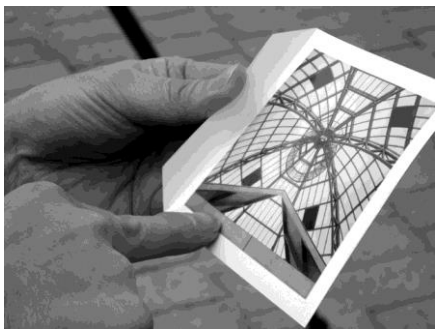
レンズは印刷用のレンズ

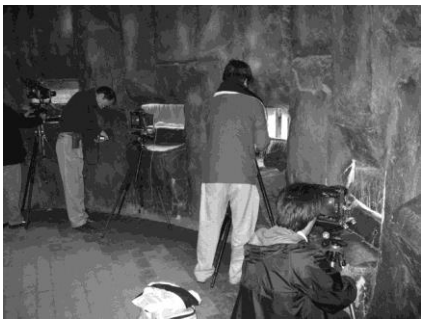
撮影状態

三脚固定はバイスを使用

葛西臨海公園撮影会スナップ

2007 年 3 月 31 日、葛西臨海公園にて撮影会が行われました。
ヨットや公園の水辺など、被写体は豊富。ここでいくつかのすばらしい作品が生まれました。





写真蒐集家の気ままな散歩(3)
ー何をコレクションするか

荒井崇

私たちゾーンシステム研究会では、オリジナルプリントをコレクションするということを会員の方に推奨しています。

そこで今回は、どんなプリントをコレクションして愉しむかというテーマで考えていきたいと思います。

ただし、私は評論家ではないのであまりむずかしい表現の理論はわかりません。あくまで、「自分の好きなプリントを、どのように蒐集するのか」ということを、エピソードを交えてまとめてみました。

なおこの記事は、昨年(2006.12.23)、研究会展覧会会場(コンタックスサロン)で行った私のレクチャー「プリントコレクションの愉しみ」の内容をアレンジしたものです。

また、記事で紹介した作品は、最終ページに載せましたので参照してください。

１．モノクロファインプリント

最近はデジタル写真の画質が良くなり、「銀塩写真との違いが無くなった。」と言ってデジタルに移行する作家が多いのですが、簡単にその違いがわからなくなって、逆に銀塩写真はおもしろくなってきたと思います。陶芸がその良い例です。何でも鑑定団がおもしろいのは、一般の人に違いが簡単にわからないからだと思います。

モノクロ印画紙の持つ深みを最大限に引き出すモノクロファインプリントは、アートの要素と工芸品の要素を併せ持つものとして、今後更に価値が上がっていくものではないでしょうか。

私たちゾーンシステム研究会のメンバーは、まさにこのジャンルを極めようと精進しているグループであります。

今回紹介するプリントは、みなさん御存知アンセル・アダムスです。

一般的にアダムスの作品は、数百万というイメージがありますが、このプリントはわずか１５０００円前後でした。もちろん本人のプリントではなく、アラン・ロスというアダムスの元助手による近年のプリント（モダンプリント）ですが、有名作家のプリントは、モダンプリントでも数十万円しますから破格値です。アメリカのヨセミテ国立公園にある、アンセル・アダムスギャラリーで販売されています。

このプリントを購入し、プリントコレクションのきっかけを作るというのはいかがでしょうか。この作品はインターネットでも購入できますので、ヨセミテに行かなくても手に入ります。
(www.anseladams.com)

また、研究会の作品展で、お互いのプリントを購入することにより、出来るだけ気軽に自分以外の作家によるプリントを手に入れることもお勧めしたいと思います。

２．コラージュ・フォトモンタージュ

合成や切り貼りのテクニックを使った写真です。
この手法は、これまでさまざまな表現が行われて来ました。コレクションの対象としては非常に人気の高いジャンルの一つと言えます。

ここで紹介するプリントは、私たちゾーンシステム研究会代表である中島秀雄さんのプリントで、陶芸作家の作品を撮影したカットをベースに、複数ネガをプリント時に合成したものです。

実はこの作品は、非常に珍しい貴重な作品なのです。現在中島先生は、ゾーンシステムを駆使したストレートなファインプリント作品が有名ですが、ゾーンシステムに目覚める以前、こんな作品も作っていたのです。この作品は、とても合成とは思えない繊細でハイクオリティーなものです。中島さんによる現在のファインプリント作品に、何か通じるものがあるような気がします。

作家の代表作のみならず、このような珍品を手に入れるというのもコレクションの愉しみと言えるでしょう。

３．ヌード

ヌードは、写真が発明された直後の１９世紀から現在まで、大変多くの写真が撮られています。ただ、写真が発明された後、長い間水面下で売られていたものがほとんどのようです。

現在では、かなり過激なものまでギャラリーで扱うようになり、正規のアートとして入手できるようになりました。

昨年は、研究会会員であり、写真コレクターとしても知られている佐久間猛さんが、９０年前のヨーロッパにおけるヌードポストカードプリントのコレクション展を開催し、大変好評を博しました。(2006.11.18－26 LA CAMERA にて開催)

ここで紹介するプリントは、私が古本屋で購入したもので、ジル・ベルクというちょっと過激なヌードで有名なフランス人写真家のプリントです。雑誌原稿用プリントとのことで、二束三文の価格で売ってもらった記憶があります。

古本屋に関しては、逆に他の店の２倍以上の価格で買わされそうになったこともあります。が、それが古本屋で購入する醍醐味かもしれません。

４．現代写真

近年、現代美術を写真で表現する作家が大変多くなってきました。
非常にユニークで楽しめる作品もあれば、難解でわかりにくい作品も多いのが特徴です。

ここで紹介するプリントは、添野さんという若い作家のプリントで、玄関の覗き穴から撮影した作品です。非常にオリジナリティーの高い作品だと感じて購入しました。

これは、広尾にある「ギャラリー工房親（ちか）」という現代美術のギャラリーで購入しました。
一般的に、日本において写真は版画より高価です。版画より売れないにもかかわらず不思議ですね。しかしこのギャラリーは、版画と同レベルの価格で若い作家のプリントを提供してくれるのでお勧めです。

５．スナップ

スナップショットは、まさに一瞬を切り取る写真ならではの世界です。

このプリントは、エドュアール・ブーバというフランス人写真家の作品で、多分セーヌ川でのスナップではないかと思われます。スナップショットのフランス人写真家といえば、日本ではブレッソンやドアノーが有名ですが、ブーバは、彼らに匹敵する写真家の一人です。

これは数年前、高円寺のイル・テンポ（現在は閉廊）という写真ギャラリーで購入したものです。私がブーバを好んでいたのを知っていた当時のオーナーが、私にこう言っていたのを思い出します。

「荒井さん、今度ブーバやります。サインが無いので安くしますよ。でもね、ブーバが先日亡くなったのよ。今度日本に来る予定だったのにね。」

ブーバが亡くなったのは、来日直前の出来事で、この展覧会にも来てもらう予定だったようでした。私にとってはちょっと悲しい思い出の一枚でした。

６．科学写真

天体写真や顕微鏡写真など科学の分野で撮影される写真は、オリジナルプリントとして一般的にコレクションされることは稀です。しかしながらよく見ていくと、中にはすばらしいものがたくさんあります。

また、あまりギャラリーで販売されることはありません。よって、ほとんどはプリントを作者に直接御願いして手に入れねばなりません。場合によっては、大学教授にかけあって無理に御願いしたこともあります。

これは、西山さんという知り合いの天体写真家のプリントです。富士山をベースに流れる星と飛行機のライトを撮影したもので、その偶然が不思議な空間に見えてきます。技術的にも６Ｘ９版フィルムによる質の高い深みのある画質も魅力的です。

西山さんは今年、２箇所のギャラリーで個展を開いています。会場ではプラネタリウムやトークショーなども行い、とても魅力的な展覧会となりました。

数年前、アメリカの写真家リンダ・コナーは、天文台が撮影した５０年以上前の天体写真ネガを借り、独自の技法で印画紙に再プリントしています。そして何と、自分のアート作品としてプリントを販売していたのです。私はそのプリントも所有していますが、とてもすばらしいものです。

７．古写真

明治、大正、昭和初期に撮影された古写真のコレクターは、ギャラリーでの扱いが少ないため、ほとんど自力で探し回るようです。時には片田舎へ行って、不要になったおじいさんの写真を譲ってもらったり、古い写真館を訪ねたりするそうです。

また、在日外国人コレクターも結構活動しています。先日は、知人の在日外国人コレクターが、何でも探偵団に出演していました。

この写真は、知り合いの古写真研究家であり販売を行っている方から購入した、明治期の外国人向けお土産用写真です。当時日本で写真館を営業していたイギリス人写真家ベアトが撮影したものです。ただしプリントは、ベアトの写真館を引き継いだオーストリア人写真家スティルフリードによるものだそうです。

当時のお土産用プリントは、鶏卵氏に着色されたものが多く、ほとんどがアルバムにして売られていたようです。このプリントは、実はアルバムをばらしたもので、ひっくり返すと別のプリントが貼ってあります。よって１枚購入すると２枚分楽しめるわけです。

８．ドキュメンタリー

ドキュメンタリー写真のプリントをコレクションすることは、写真の良し悪しのみならず、歴史、社会性、時代背景をも味わうことが出来ます。

このプリントは、前記古写真同様、知り合いの古写真研究家から特別に安価で譲っていただいたものです。第２次世界大戦の沖縄地上戦を撮影したもので、アメリカ従軍カメラマンによるものです。（作者は不明）

基本的には売り物なので、人気の出そうな戦闘の激しいイメージ以外で選んで欲しいとのことで、このイメージを選びました。

一見すると沖縄の田園風景ですが、よく見ると

アメリカ兵が列を作って歩いています。戦争のもの悲しさ、虚しさがよく表現された写真であり、画質の悪いプリントですが、私の最も好きなドキュメンタリー写真のプリントです。

ゾーンシステム研究会定例会日誌

2007年2月17日(土)【総会】

横浜市市民活動支援センター会議室

・出席者：中島代表、山本、菅野、宇野、小野、木下、石井、荒井、松本、畑、圓子、鈴木武、田中肇、岡崎、田中英、北野、古谷津、橘田、長谷川、越後、宮内、鷲尾、小菅

１．総会の成立　（事務局・畑）

案内状送付＝３８名

出席（途中入場も含む）＝２２名

欠席・白紙委任連絡＝１１名（退会１名）

出席と白紙委任が過半数となったので総会は成立する。

２．中島代表挨拶

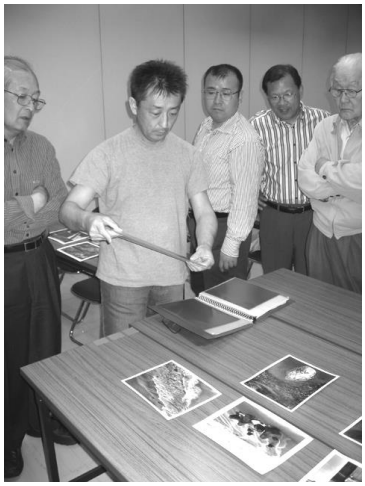
・２００８年のアンセル・アダムス展に向けて、ゾーンシステムのワークショップの開催が予定されている。（ヨセミテ撮影会もオプション）

・我々も自分のテーマを決めて作品創りをすすめ、ぜひアダムス展に協力展示できるようにしたい。

・写真学校の卒業制作展が開催されているが、デジタル主体なのは時代の流れとしても、表現手段に疑問を感じる作品も多い。

・ハッセルは一機種を残してデジタル化する。

数百万円で数年毎にモデルチェンジするという。銀塩時代はプロもアマも使用機材に大差が無かったが、これからは写真も格差社会になるのだろうか。



３．総会議長の選出　小菅氏を全会一致で選任

４．昨年の活動報告（事務局）→資料参照

５．昨年の会計報告（会計・松本）→資料参照

［質疑］

・イベントの交通費、宿泊費などは中島代表以外にも支給すべきではないか？

⇒会則（附則２）で代表にのみ支給が規定されている。予算枠も限られているため現行のままとしたい。ただし、今年以降、写真展への補助に比重を移す配分とする。

・会計報告資料は見易く（字を大きく）、かつ事前に配布してほしい。予算と実績を対比すべき。

⇒来年以降改善を図る。総会資料はホームページで事前に閲覧できるようにする。

・代表に対する通年の指導料と、写真展の指導料は合算して報告すべきではないか？

⇒写真展の費用をまとめて報告する慣例が確立しており、現行のままとしたい。

・会計年度（日付）を明記すべき。

⇒事業年度と会計年度を会則に規定する。

６．会計監査報告（議長代読）

当該報告は適正である。（監査役＝宮岡、赤羽）

７．今年の計画説明（事務局）→資料参照

・会員の参加しやすい撮影会を増やす。

・地方展は会員の負担も大きくなるため今年は見合わせたい。
・東京展（シリウスを予定しているが、未決定）に注力する。
・例会の開催場所を都内でも探す。（北関東の会員が増えているため）

８・今年の予算説明（事務局）→資料参照
　研究費の支出を節減し、写真展補助を増やして、写真展への参加を増やしたい。

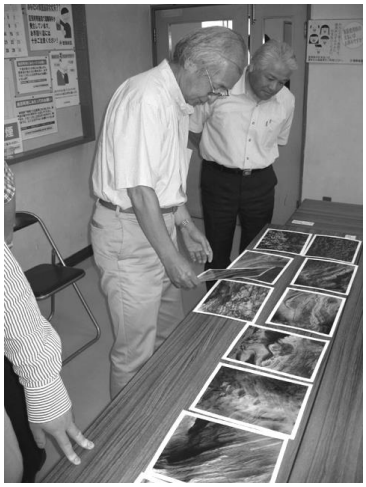
９．その他議案
・役員の異動：古川氏退会。
　橘田氏を役員に選任。
　また、監査役を宮岡氏にも委嘱する。
・「賛助会員」の設置：「ゾーンシステム講座未受講でも、代表と役員の承認があれば賛助会員となれる」旨を会則に追加する。
・会費等の振込先：銀行口座のほかに郵便局の口座も設けて会員の利便を図ることを検討する。
（追記：後にこの案は、口座開設に問題があり取りやめになった。）
[上記の報告・議案は賛成多数で承認された。]
１０．新役員　橘田氏挨拶

2007年3月10日（土）
横浜市市民活動支援センター会議室
・出席者：中島先生、菅野、宇野、北野、古谷津、松本、畑、田中英、岡崎、越後
・見学者：酒巻氏、高島氏
・作品持参者：北野、古谷津

● 中島先生より
・シリウスへのプレゼンテーション作品が不足
→会員に至急連絡する
・アンセル・アダムス撮影ツアーの日程が決定（6/1～6/8　26.4 万円）
・ゾーンシステムワークショップまだ余裕あり
→会員以外にもＰＲしてほしい。
・撮影会実施予定（3 月 31 日：葛西臨海公園）
● フィルム現像用タイマー説明（古谷津氏）
● 作品講評
今回からの試みとして、まず会員相互で意見を述べ、最後に中島先生から批評を頂くという進行にした。

2007年4月14日（土）
横浜市市民活動支援センター会議室
・出席者： 中島先生、菅野、小野、山本、北野、古谷津、松本、橘田、小菅、宇野、岡崎、長谷川、田中英、石井、圓子、鈴木武、鈴木匡、畑
・作品持参者： 山本、北野、古谷津、松本、橘田、小菅

● 中島先生より
・写真展はシリウスに作品をプレゼンし、１１月開催を希望している。審査結果は４月下旬に判明の見込み。１３～４人からプレゼン用の作品が送



られたが、クオリティが低く、今後にむけて向上が必要。
・常に小型カメラを持ち歩き、気のついたものを撮るなど、作品創りの努力を継続してほしい。
・また、各自で８×１０のクリアファイルを用意し、例会でＯＫの出た作品を「貯金」すること。
・荒井氏ホームギャラリーの写真コレクション展開催中
・ワークショップ開催中
東京１４人、横浜５人参加。
・ヨセミテ撮影旅行　　会員からも参加してほしい。問い合わせは中島代表まで。
・日大芸術学部　映像芸術専攻制作展
かつて人物撮影をお願いしたアンドレイナも出展。
会員の情報
アートフェア東京（終了）では、約８軒のギャラリーで写真を扱っていた。（石井）
● 作品講評

2007年 5 月12 日(土)
横浜市市民活動支援センター会議室
・出席者： 中島先生、小野、松本、荒井、宇野、越後、宮岡、長谷川、石井、浜野、圓子、石川、畑
・見学者：池谷氏
・作品持参者： 荒井、越後、長谷川、畑、池谷

● 中島先生より
・写真展の会場はシリウスに決定した。
展示期間：１１月１５（木）～２１日（水）
搬入：１１月１４日（水）
プレスリリース用の原稿と写真は８月２１日締め切り
Lサイズ（≒４×５密着）プリントを５種類×１５枚程度を提出する。
各自、例会の講評でOKの出た作品を準備願います。
・人物撮影会　７月２９日（日）開催で計画中。
・ヨセミテ撮影ツアーは９月に延期となる。改めて会員からも参加を募集。
● １１×１４超大判カメラの試写
（宇野氏自作カメラのデモ）
詳細は本会報の本文に記載
● 作品講評
・OKの出た作品はクリアファイル（別途選定）に保存し、写真展に備えること。

2007年 6 月 9 日(土)
下北沢代沢地区会館
・出席者：（中島先生欠席）、宇野、山本、佐久間、北野、橘田、荒井、石井、岡崎、加藤、松本、鈴木武、畑
・作品持参者： 北野、橘田、荒井、岡崎、畑

●佐久間氏情報：
・大辻清司展（松濤美術館にて開催中）見学と写真家宅訪問
・・・７月中に希望者を募り実行したい。
（ビール持参が条件）
・光田由里著「写真、『芸術』との界面に　写真

史1910年代-70年代」青弓社　2800円＋税
・・・若干数を割引価格で入手可能。希望者は佐久間氏に問い合わせること。

● 石井氏情報：現代写真研究所同窓会写真展
6/28～7/1 スペース・ゼロ
（代々木　全労済会館地下）
昨年の展示作を出品する。

● 荒井氏情報：土居慶司氏のフード紹介
以前紹介した折りたたみ式フードの第２弾。
改良点は、広角レンズ対応、フード長を伸ばしたこと。（詳細は次ページ参照）

● 持参作品の相互講評

● **重要：１１月写真展へのスケジュール**
・７月例会　広報・ＤＭ用写真５種類選定
→各１５枚プリント
（Ｌサイズ又は5×7又は4×5密着）
→中島先生へ提出
（８月２０日までにシリウスへ送付）
・８月例会　全員の出品作決定
・９月例会　出品作のプリントチェック
→焼き直し指示
・１０月例会　出品作のプリントチェック
→焼き直し指示（２回目）
・１１月初　額装作業
・１１月例会（作業予備）
・１１月１４日　搬入
・１１月１５日～２１日　展示

● ７月２９日　人物撮影会
（詳細は別途連絡）

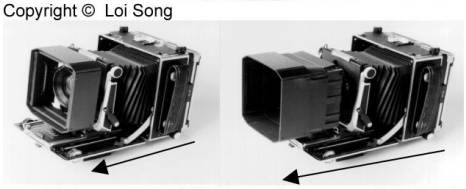
例会（６／９）にて紹介した土居氏開発による新型フードの紹介です。

画期的なレンズフードの誕生

modularhood

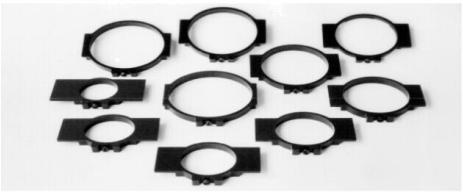
米国特許登録済: US6597873, 日本特許出願済

Copyright © Loi Song



♦ 最高のフード性能 有害フレアを極限まで除去

スムースな伸縮操作で、広角から望遠までの幅広いレンズの画角に対応



♦ シンプルデザイン 画期的なモジュラーシステム

- ほとんどの小中大判カメラレンズに適合する、バリエーション豊富なアダプタ群
- 全てのアダプタに装着可能な一種類のフード

♦ 全天候型 風雨時の屋外撮影ＯＫ

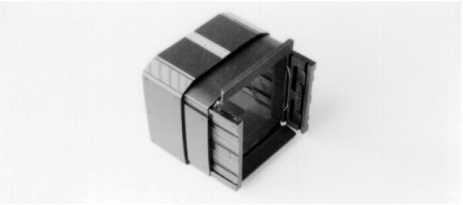
- 蛇腹式フードでは困難な悪天候下アウトドアーからスタジオまで対応可能
- 耐久性を有した高性能樹脂製の堅牢なフード

♦ 折りたたみ式で携帯性バツグン

瞬時に折りたたみ、専用ケースに収納できる、携帯性バツグンのフード

♦ 瞬間をのがさない インスタントセットアップ

撮影準備はレンズキャップをとり、折り畳んだフードを開き、あらかじめレンズにマウントされたアダプタにワンタッチで装着するだけで、す早く瞬時に完了



♦ 充実したフード標準機能

- デュアルスロット：標準スロットは大半のレンズ対応、補助スロットはフィルター、又は、超広角レンズ対応
- 上下フードフラップ：フード内外への開閉により、フード四辺を固定し着脱操作を容易化、又、レンズアクセサリの操作が可能
- カメラ煽り操作時のフード補正シフト可能

仕様フード:

●フード伸縮長: 最短: 25 -最長: 100mm
(水平開口角度: 150 - 50˚)
注：標準、補助の２本のアダプタ装着スロットを使用した場合
●標準機能
○標準スロット(カメラ煽り操作時のフード補正シフト可)
○補助スロット：100mm 薄膜ゼラチン / 厚膜レジンフィルタ/アダプタ、いずれか、各１枚 装着可（スライド可）
○フードフラップ: レンズ側開口部上下に設置、約±９０˚開閉
●専用ケース付き
●寸法 (H x W x D)
○使用時: 124 x 120 x 46 – 104mm
○専用ケース収納時: 30 x 220 x 50mm

仕様アダプタ:
お客様のレンズに合わせてお選びください

●中大判カメラレンズ用
○ 種類: 鏡筒外径（フィルタ径）：42 (40.5), 51 (49), 54 (52), 60 (58), 70 (67), 75 (72), 80 (77), 85 (82), 90 (86) mm
○ 寸法 (H x W x D): 55 – 104 x 100 x 8mm
注：アダプタをレンズに常時装着したい場合は内側挿入型レンズキャップ（ETSUMI, HAKUBA, MARUMI 等市販品あり）が別途必要となります
●ハッセルブラッドカメラ用
○種類: CF レンズ (フィルタ径 60mm)
○寸法 (H x W x D): 84 x 100 x 8mm
●その他のレンズのアダプタについては、個別に相談ください
価格: フード: 20,000 円、アダプタ: 2,000 円（保証：1 年間）

PHOTOGRAPHY BY
KEIJI DOI
LIMITED EDITION PRINTS
P. O. Box 18, Ayase, Kanagawa 252-1191 JAPAN
tel. 81(0) 467-77-7117 e-mail: mhood@gol.com

Information

【トピックス】

[ウィン・バロック展鑑賞会]

２００７年５月２６日ウィン・バロック展鑑賞会が行われました。（場所：ＰＧＩ）

ウィン・バロックは、アメリカ西海岸の代表的な写真家の一人であり、大変魅惑的な光景を８ｘ１０カメラで表現しています。

今回の展覧会では、ウィン・バロックの被写体であり娘であるバーバラ・バロックの、父に関する手記が展示されていました。ウィン・バロックの創造的作品制作の様子を始めて知ることが出来ました。

今回の鑑賞会は、私たちの作品制作に多大な影響を与えてくれたのではないでしょうか。

【売ります】

中島秀雄

・ゾーンシステム・ハンドブック(朝日ソノラマ) 10 冊、各 2800 円（9 月に絶版になります。）

・レオナルド 4x5 ピンホール・カメラ

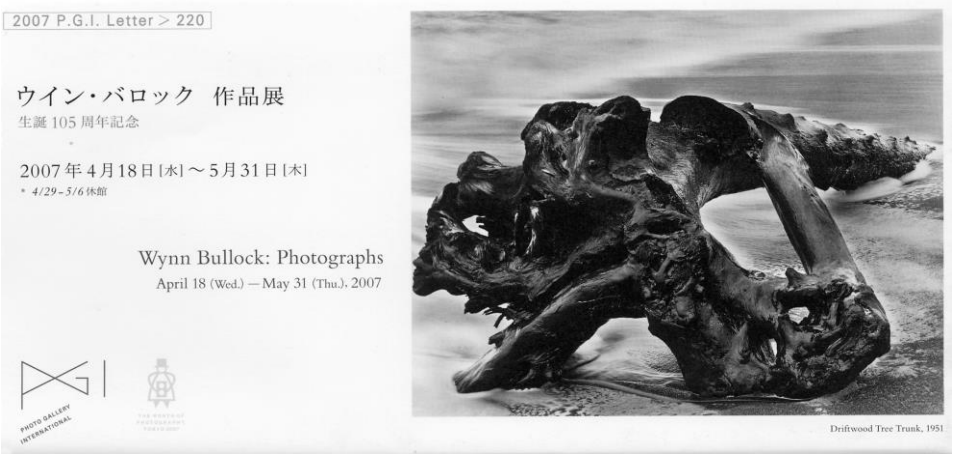
15000 円（本文記事の写真参照）

【買います】

荒井崇

・PEAK引き伸ばし用ピントルーペ

（レンズへのカビが無いこと）5000 円以下にて



【原稿募集】

会員の皆様からの原稿をお待ちしています。

［以下原稿投稿に関するお願い項目です。すみませんがよろしくお願いします。］

１．写真原稿は、紛失事故防止のためできるだけネガやポジは避け、プリントでお願いします。

２．手書き文章はスキャナーでパソコンへ入力できないので、原則として受け付けません。以下いずれかの方法にて投稿願います。

・ワープロやパソコンでプリントアウトしたもの、（スキャナーでパソコンへ入力します。）

・パソコンの電子メール

・ウィンドウズの Word2000-2003

・text ファイル

（ちなみにこの会報は、ウィンドウズの Word2003 で作成しています。）

ただし、どうしても手書き文章しか投稿できない事情がある場合は、事前に御連絡をいただくようお願いします。

３．イラストは手書きでも結構です。スキャナーで取り込みます。

［編集部］　荒井　崇